

突哨山周辺のヒグマ 傾向と対策 突哨山運営協議会資料

20180913 NPOもりねっと（山本牧）

1. 個体識別

- ☆足跡 前掌幅で 11 cmと 13 cmの 2 種類
小型：11 cmは昨年生まれ（1 歳半）の親別れ間もない若グマと推定
中型：13 cmは 3 歳前後か、若い中型オスと確認
頭胴長 155 cm、体高 67 cmと推定（8 月 4 日突哨山画像から）
- ☆画像 小型はびびの路と跨道橋、中型はカタクリルート、堆肥場、跨道橋
跨道橋の小型個体は 6 月 21 日の 1 回（入り）のみ
- ☆痕跡 男山公園にフン（木の実）、トドマツ林、びびの路でアリ食痕



2. 出現、行動の分析

☆小型個体（主に突哨山中北部～堆肥場で行動）

- 5 月 1 日 高速道路ぞい（目撃）
- 5 月 6 日 びびの路（目撃）
- 5 月 6-8 日 扇の沢（足跡）
- 5 月 24 日ごろ 片山牧場（ロール荒らし）
- 5 月 25.26 日 びびの路（撮影）
- 5 月 28 日 堆肥場（撮影）
- 6 月 17 日 跨道橋（撮影、入り）
- 7 月 16 日 びびの路アリ食、道道で目撃

経験の浅い個体なので、農地・市街地への進出もあり得る。

現状では人家、人間への積極的接近はほぼない。

日中も行動しているので、人との偶発的遭遇は考えられる。

☆中型若オス（跨道橋を出入りし堆肥場～北比布。8 月上旬は突哨山南部へ）

夕方～深夜に橋から入り、1～3 日後の明け方戻ることが多かった。
8 月上旬、突哨山中南部で撮影、フンを残して以降は確認がない。
以前から堆肥場付近に来ていたと考えられるが、通報例はない。
極めて用心深く目撃ゼロ。人家・人への接近はしていないようだ。
捕獲ワナに接近はするが入らない。用心深い Trap shy かも。

☆誘因は堆肥場

2 頭とも堆肥場には誘引されていた。斜面側の一斗缶と推定。
内容は不明。流動物だとフンではわからない。
本来行動圏の鬼斗牛山（三角山）から跨道橋が通路となった。

☆若い独立間もない個体

2 頭とも若く、独立して半年～2 年以内の
個体。この年齢は生まれた場所を離れ、母
グマや他のオスグマとの競合を避けて、落
ち着き先を求めて拡散する傾向にある。跨
道橋が通路となり、偶然入り込んだ突哨山
が遊歩道閉鎖で静かになって、しばらく滞
在した、ということも考えられる。
突哨山自体は秋の食物はそれほど豊富では
ないので、「居心地が悪い場所」という状況
を作ることが大事かも知れない。



3. 今後の行動予測

☆春から夏

春から初夏は沢にフキ、セリ科などの食草が豊富
繁殖期だったが、ペアリング行動は確認できなかった
7月中旬と8月上旬、ぴぴの路や突哨山中部でアリ食痕が確認された

☆夏から秋

夏の終わりに食草が固くなり秋までは端境期。畑荒らしが増える時期。
突哨山周辺は水田が多く、森林近くに誘因作物が少ないのか被害は少ないが、
比布側では9月、カボチャが荒らされた。

腐朽丸太のアリの巣を荒らす食痕は、ぴぴの路で8月を通じて発生。

秋は堅果（ドングリ、クルミ類）、漿果（野イチゴ、ブドウ、コクワ）を食
べるので、行動は谷筋から尾根に変わり、範囲も広がる。

☆晩秋から初冬

冬眠に備え木の実などを飽食。冬眠穴も探す

冬眠前で行動パターンが変化し、本来の生息地に戻ろうとする可能性もある。冬眠前後は行動域が広く、雪上に足跡などが残りやすいので、面的に素因材を把握する調査には最も適している。

初冬の雪の降り始め（11-12月）には遊歩道を重点に、早春（3-4月）には堅雪の上を幅広く、雪上の面的な足跡調査を予定している。

もし公園区域内で冬眠をするようであれば、来春以降も定着する可能性が強まり、遊歩道再開にも大きな障害となるだろう。

☆参考 ナワバリについて

野生動物のナワバリは、餌資源を確保するため同種動物を排除して一定の空間を守る行動を言うが、ヒグマにそうしたナワバリ行動はない。

個体ごとの行動圏はほぼ決まっているが、それは互いにかなり重なりあうことが普通。季節ごとに食草が変化し、高い学習能力によってそれらを探しながら、巡回・移動するので、季節ごとの「良い場所」には複数のヒグマが集まる。個体間の強弱（社会的順位）により、互いの距離は保ち、時に追い払いもあるが、「空間を守る」ためではなく、あくまで個体間の相対的な心理的距離感と言える。その点でも肉食型ではなく草食型の行動様式と言えるだろう。

対策を行う場合、誘因物があれば複数のヒグマが集まるし、跨道橋をコリドー（移動回廊）として複数のクマが利用することもあることを考慮する。

4. 対策の選択肢

☆短期的 9月上旬はまだ端境期であり、畑荒らしの可能性は続く。

ワナに慣れて捕獲される、畑を荒らす、人里に現れる、などの可能性がある。

跨道橋の封鎖は可能だが、高速道路のフェンス越えを防ぐ対策も必要。

堆肥場の一斗缶は食べ尽くされ、跨道橋の通行は減っている。

特にワナ設置（8月21日）後はヒグマやシカ、キツネの通行はない模様。

☆中期的

秋になると食性が変化し、冬眠の準備行動も始まる。

本来の生息地に戻る可能性が出てくる。

突哨山管理の面では公園区域内で冬眠するかどうかの確認が重要。

積雪が始まる初冬、足跡が残りやすい遊歩道を踏査し、存在や行動を調べる。

冬眠明けの3月末から4月にも、雪上を広く踏査して存在や行動を確認する

突哨山で冬眠した場合、そのまま定着する可能性が高い。

☆早春のカタクリ時期

ヒグマの確認状況によって、閉鎖続行、部分開放、全面開放が選択肢。

部分開放は、突哨山口から木もれびルート～南折り返しのコースを想定。
管理要員を配置し、情報収集とコース外散策の防止に当たる

☆長期的

ヒグマの移動経路を把握し、自動カメラなどで侵入を察知できるようにする。
高速道は侵入のバリアーだが、いったん入られると出づらい。

高速道路沿いの柵の強化（最上段に電気柵 1 本）や、アンダーパス・橋の監視や通行抑制などの対策が必要ではないか。

堆肥場の誘因物除去も重要。

人の気配がない全面閉鎖はヒグマに安心感を与え、かえって内部侵入を促す結果になっているのかも知れない（雨竜沼でも同様の事例あり）。安全に配慮しつつ、一定の作業などを行った方が良いのかも知れない。

■参考 なぜ近年ヒグマ出没が目立つのだろう

データのものは十分ではないが、個体数がゆっくり増えていることと、ヒグマの行動が大胆に、人を恐れなくなっていることの両要素が関わると考えられる。

個体数を直接計測した数値はないが、捕獲個体の数や年齢などから母数が増えていることは読み取れる。その要因はベテランハンターの減少など捕獲（狩猟・駆除）圧の停滞、農作物荒らしによる繁殖増（母グマの栄養改善⇒産仔数増、新生児死亡率改善ほか）などがあるだろう。

ただ年次ごとの出没変動は、個体数以外に人慣れ、畑荒らし慣れした特定個体の出現の影響も大きい。ヒグマの行動は母グマから子に伝わることが多いので、親子連れによる畑荒らしは翌年以降、独立した若グマによって被害が拡大する傾向がある。好奇心が強く、警戒心が薄い若グマの出現は、大きな地域問題になる。

いっぽう、人目を避け、ワナにもかからない用心深い成年グマの存在もある。毎年のように被害が続き、ワナも効果がないケースがある。

いずれも問題個体を特定して 排除しないと被害は減らない。行動・移動の把握、誘因の除去や電柵などによる防護、問題個体の捕獲などを組み合わせる必要がある。

■参考 追い払いや生け捕りは可能か

結論から言うと、どちらも専門チームが必要だし、社会的条件も整っていないので、極めて困難。

突哨山のように細長い地形での追い出しは簡単に見えるが、勢子の動きと追い出し先がそろわないといけない。勢子は大騒ぎするのではなく、互いに追い出し線を維持し、クマを興奮させないよう静かにゆっくり、歩調を合わせて動く必要がある。そんなチームはないし、クマが平地に出る、勢子側に向かうなどの危険もある。

さらに突哨山北部は人家が点在し、高速道路で仕切られている。追い出し、待ち伏せ

駆除とも困難と言える。

ベテランハンターの減少で、駆除はワナ捕獲（とどめは射殺）が主流になっている。ワナは警戒心の薄い新顔クマほどかかりやすく、被害をもたらす常習グマには避けられる傾向がある。駆除しても被害が減らない理由の一つである。

銃駆除は重要な手段だが、見通しのきかない夏場、人家や道路近くでの追跡や射撃は危険であり、獲物の背後に斜面（バックストップ）がない状態での発砲はできない。夜間、路上の発砲も禁止されている。

駆除用のワナは鉄骨・鉄筋を組み合わせたオリ型が普通。重く丈夫だが、ドアが閉まると多くのクマは暴れ、爪や歯がぼろぼろになってしまう。とても野外に放獣できる状態ではない。

調査用の生け捕りワナは構造が全く異なり、小型で細長い筒状。中に入ったクマはあまり動けず、外も見えないので体力の消耗が少ない。人の姿を見せずに素早く麻酔を打てるよう、ドアや作業窓が工夫されている。

放獣先も国内では同一市町村内とされている。もちろん、山林所有者や地元住民の同意も必要になる。放獣されたクマは人への警戒心を強く持つので危険が増すことはほとんどないが、一般的な受け止めは「危険動物を野に放つ」となる。

移動放獣に積極的な県（福井、長野）もあるが、道内での移動放獣はほとんどない。調査捕獲の場合は、ほぼ全部捕獲地点での放獣となっている。



駆除用ワナに入り射殺されたヒグマ（上川町） 円筒形の生け捕りワナで麻酔準備（斜里町）

■目撃情報の信頼性、駆除の効果

道内自治体のヒグマ対策は目撃や被害の通報で始まり、駆除を「対策」としている。これらは本当に信頼性があり、効果があるのだろうか。

まず目撃情報は、「クマに気づき、通報する」という2つの段階がある。旭川市郊外でもよく耳にするが、慣れた地元の人にはクマを見かけても必ずしも通報するとは限らない。特に出没が続くと、通報は激減する。

一方で都市部の人々は、クマに気づきにくいですが、見かけるとかなりの確率でその場から通報する。つまり、通報の数や場所は、ヒグマの人里接近に比例しているとは言い難い。しいて言えば、「行動の変化」の兆しを知らせてくれていると考えられる。

ヒグマ情報は、不確かな目撃通報に依存せず、足跡や食痕、自動撮影など、時間帯や個体識別が検証可能な情報を積極的に収集し、行動を解析、予測することが望ましい。

駆除の効果はどうか。ヒグマの行動を個体レベルで詳細にみていくと、「おいしい場所」に集中する特性から、問題グマは1頭とは限らず、駆除されるのもその一部、しかも経験の浅いクマであることが多い。

これは就実の丘や東旭川などで、若いクマが捕獲されても、農業被害がなかなか減らない状況に一致する。用心深いクマに対処できるのは、電気柵などの防御や人と犬などの巡回、そして、クマの用心を上回る腕前の狩猟者である。

仮にワナで1頭を捕獲しても、それは被害やリスクの一部であり、住民の一時的「安心」は得られても、持続的な「安全」とイコールではない。ただし、ヒグマ対策は、ヒグマ側のリスクを下げるだけでなく、住民にとっての不安を緩和することも重要な要素なので、総合的な効果を検討すべきである。



上：びびの路で丸太を動かしてアリを食べた痕跡
左：就実の丘のスイートコーン食害。フンがあり、
長時間畑にいたことがわかる

ヒグマの季節ごとの食性変化。サケを食べない十勝内陸のデータなので旭川もこれに近いと考えられる

